聖ヶ丘
第30号
2009・6・14 発行
金光教教学研究所

「資料によって」

児山真生

「数えてみれば、今年は入所から十五年目」、と書いてみて、自分が驚いている。何年経とうとも、気持ちは今なお「若手」のままであるし、よもや「巻頭言」を担当することになろうとは。武田鉄矢ならずとも「思えば遠くへ来たもんだ…」。

ずいぶん前、前所長から「（第三部の中で）いつまでも三男坊気分じゃいけんよ」と言われた場景を、ついこの前のことのように鮮やかに思い出す。それが今では曲がりになりにも「長男坊」である。今回、「巻頭言」を書こうとして、何故だか過ぎた時間とその間の取り組みのことを思い返した。その時、忸怩たる思いと共に、ふと「資料によって」という言葉が湧いてきた。これまでの自らの歩みは資料によってあり得たものであるし、これからもこのことに変わりはないと思う。

「資料によって」、その源流は初年の頃に言われた「資料と出合った責任をとれ」である。とはいえ、実際の日々においては、了見違いから行き詰まりを感じることも多々あった。そんな時、息を吹き返すことになるのは、決まって資料との出合いによってであった。「資料と出合った責任をとれ」、それは奮起を促す言葉であると共に、迷った時に立ち戻る心のふるさととなっている。

さて、ここ数年来、人々の名前が記された資料（「講社署名簿」や「広前歳書帳」など）を用いて、信仰が伝わり広がる様相の究明に取り組んでいる。現在の研究に至るには色々な経緯があった。ここでは、その中から私の原体験と言える出来事を述べてみたい。

平成十六年の秋、「戦病死者弔慰報告」という資料の目録を書いていた。この資料は、昭和十二年から十七年にかけての戦病死者の会葬復命書を教区単位でまとめて綴ったものである。会葬対象には、教徒、信徒のみならず「教外者」も数多く含まれていて、綴りの厚みは相当なものである。目録は、資料の内容を踏まえて書く。文章が書かれている資料の場合は、読んでいて新たな事実を発見することもあって興味津々取り組む。一方、「戦病死者弔慰報告」の場合、繰っても繰っても、出てくるのは亡くなった方の氏名、葬儀の日時、場所等々、わくわくしない。

なかなか終わらない作業を続ける中、正直「この資料は要るかなあ？」とさえ思っていた。その最中、ふと「お前にとって私は、数多の戦病死者の一人であり、数の対象かもしれない。しかし、私にも生きた事実がある。信心した事実がある。それがお前に分かるか？」と聞こえ、打ち抜かれる思いがした。そして、資料を「使えない」と判断するのも、自らが「使えない」人間だからだと気付いた。その時分、自らの研究は停滞していた。結局、見る（読む）側の〈つまらなさ〉を棚に上げて資料の問題にしてきていたのである。

そして現在、今なお「使えない」と思う資料は数多い。とはいえ、いま「使えない」からといって、何もへこたれることはない。資料は逃げない。時間がかかろうとも、見えるまで、分かるまで、ありったけの創意と工夫をこらしながら、しっかりと向き合って行けば良いのだから。

「資料と出合った責任をとれ」、言われた時の力強さそのまま、耳朶に響き続けている。

（第三部長）

平成21年度研究生入所時撮影

★平成二〇年度研究報告★

座談会

〈参加者〉岩崎繁之、佐藤道文、堀貴秋、白石淳平、高司智太郎、高阪有人（司会）

（司会） 本日は、本年度の研究報告、また検討会を振り返り、現在の研究所の動向について話し合ってみたいと思います。

まず、本年の各研究報告には全般的に、何か取り組みのところで変わったものが出ていた様に思いますがどうでしょう。

（白石） そうですね。特に調査を基にした第二部の各研究報告（高阪報告「震災の体験談を聞く―信心理解を共にするあり方を考える―」、高橋報告『信徒の実践にみる「現場」の生成』、大林報告「震災被災者との懇談、および教話の取り組み―信心理解を共にするあり方を考える―」）が“私”という主語を使って書かれていたことに新しさを感じました。

（堀） 私も同感です。なるほど”私”という言葉を用いて、研究者自身の意識の変化も考察対象にしようとしていることがわかりました。読み手も引き込まれる感覚があり、研究に“私”という主語が使われるおもしろさを感じました。

（司会） いま、私自身の研究でも言われているのですが、こういう記述をしたのも、調査から生み出された問題関心からです。調査は、懇談という形で進んでいったので、研究者も巻き込まれることになっていました。そうなると、研究者自身がその現場から問われますよね。自ずと自分の意識を考察対象にしなければならなくなったわけです。つまり、研究者自身もその現場に関わっているので、自分の意識も考察の材料にすることが要るのだと思って、そのような表現を使うことになったんです。

（岩崎） この方法意識は究明すべき対象と、研究者との距離感から生じており、もっと言えば、その不全感に促されながら、研究の前提的立場を積極的に問うことになったと言えます。前提を問うことは、調査や研究者、対象者の固定的な関係を見直し、さらにはそこから信心の理解をめぐる「関係性」全般を問うものなんでしょうね。

（高司） 「研究の前提、関係の前提を問う」と言われたんですが、他にどういうことがありましたか。

（堀） 例えば、佐藤報告（赤沢文治の「祈念祈祷」経験―備前・備中地方の祈祷者の活動に注目して―）もそうでしょう。備前・備中地方での呪術的信仰、特に祈念祈祷への注目から、民俗的な世界で生き続けた赤沢文治の経験を見ようとしていました。それは、止揚される対象としてのみ捉えられてきた感がある金光教創出の前提条件としての民俗世界を、再度組み込んで金光教の信仰世界として考察しようという試みであると思います。また、岩崎報告（神表象集としての「お知らせ事覚帳」）が、「覚帳」の筆致から考察を出発しているのも、「覚帳」という資料の前提的性格を、いま一度問い直すということがあったと思います。

（司会） 前提への問いということに関連して、他にも思い当たるのは、児山報告（作州からの参拝者と大本社―「水脈」に注目して信仰の伝わり、広がりを考える―）です。当時の水運ネットワークから参拝の実態に迫ろうとしていますが、そこでは、布教者の個性や情念に比重を置いたものとは違う布教史を予感しますよね。また都市形成に伴った地縁・血縁から離れた人々の流動から布教の様子を窺おうとする堀報告（都市社会における生活と信仰―二本木教会「奉献者名簿」を中心として―）も、そう言えます。

（佐藤） いま、前提を問うという面から今年の研究報告が話されるんだけど、少し確認がいると思う。つまり、研究としてそれを問う立ち所や問題意識がどうしっかりしていると言えるのか。それは、口で言う程、簡単なことではないし、その上

で前提への問いが何を意味しているのかはさらに大問題になるのだけど。

（白石） それに、直接、答えることにはならないんですが、先に話が出た児山報告での「教祖御祈念帳」（広前歳書帳）の使われ方が興味深かったんです。というのも、「教祖御祈念帳」って教祖や教祖広前の様子を見ることに自分自身がなっていて、資料を見るにも先入観があったんですが、そうではなく、そこに「広がりを見いだすんだ」ということに、おもしろさを感じました。その意味で、資料の取り上げ方一つにも何か新しい問いの構えが出ているんですかね。

（岩崎） これまで、主に、教祖研究で扱われてきた「教祖御祈念帳」という資料が、布教史的な関心から捉えられていました。これには、いま一度、教祖研究としても資料の可能性をどう見るのかと触発されています。

（高司） 加藤報告（近世末期の村落社会における秩序とその維持―大谷村で培われた赤沢文治の信仰を考えるために―）もおもしろかったんです。教祖は出てこないし、個性派の住民が出てくるし…。なんか大谷村のイメージが変わるというか。

（司会） 私は、「教祖のいた大谷村」から「そんな大谷村にいた教祖」という視線へ促されていく方向性を予感させられつつ、まずは「大谷村」へ踏みとどまるという研究の立場を読んだのだけど。小野家資料を「教祖がいた大谷村」を見るために扱うのではなく、まず、小野家資料から浮かんでくる様相を描くことに徹していく姿勢というか。それは小野家資料を見る視点への問いかけだと思います。

（佐藤） 資料を見るにしても、その資料を見る研究者自身の視点が問われているということでしょう。資料に出合って研究者がどのような視点を立てるかで研究の形は決まりますが、実際、その視点は資料から研究者自身を問うてくることになってますよね。

（堀） その問われ方は、やはり研究者自身が置かれている時代状況、信仰状況において自明とされることがらの問い直しに通じていると言えるんじゃないかなあ。

資料も、これまで、研究で扱ってきたのは「すべからく金光教の中の資料」としてきたのだけれど、そういう自明性を問われていると思います。

（岩崎） いま、「問われ方」ということが出たので思うんだけど、やはりそうなると、研究者としての〝私〟が問われてきます。そのことは、同じく、「金光教」ということでも言えるんですよね。

これまで教学で問うてきた問いの構えは、研究対象に向かって、「金光教にとってそれ（研究対象）はどういう意味があるのか」というものでした。金光教が対象を位置づけるあり方です。でも、それが最近は、「それ（研究対象）は金光教に何を投げかけるのか」というように、根本から問われる対象として受けとめようとしているんじゃないかと思うんですよ。

（佐藤） これまで、対象を位置づけ可能としてきた「金光教」（への視線）をも問いにして、自らの立ち位置を見きわめつつ、求めようとするのが、現時点での問いの構えであると言えるでしょう。

（岩崎） それほどに、意味づけを与える方だった「金光教」なり、「私」という、確固たろうとしたあり方が揺らいでいる。それは何も悪いことじゃなく、その自明性の揺らぎを積極的に引き受けて問おうとしているのじゃないかと。

新たな世界への開けや信心からの呼びかけのダイナミクスに呼応する仕方とも思える。

（司会） いま、ここで話されたのは金光教にとっての意味を問うことから「研究対象にとっての金光教の意味」への問いという、問いの構えの反転の教学的な意味の問題だと思います。

それは「私が問う」ということでありながら、時代や信仰状況からの「私への問い」となってあらわれていて、問いを構えるあり方としてつながって見えてきていますね。資料への注目が多かったことも、「問いの構え」が反転していることへの意識を示しているようにも思えます。

今日はありがとうございました。

先生を偲んで 悼

昨年の12月19日、嘱託の荒木美智雄先生がご帰幽になられました。

先生には、昭和52年11月1日から金光大神研究・教義研究の分野をはじめ、教学研究全般に亘り多大なる御尽力を賜りました。

享年70歳、在職年数は31年2ヶ月でありました。

今回は荒木美智雄先生を偲んで所内外の４名の方に寄稿をお願い致しました。

〈周縁〉について

―荒木美智雄君追悼―

嘱託　前田祝一

荒木君は昭和一三年三月生まれ、私は同年二月生まれ。出会いは全国学生協議委員会の席で、二〇歳の頃。父同士も教区はちがっても団参などで交誼がありました。京都学生会が集めた原水爆反対の署名簿が、私の大学の寮に突然送られてきて、よろしくとのこと。この署名簿を持ってソ連とアメリカの大使館へ抗議に行き、その後アメリカ本国から彼の元へ受領の手紙が来たとのことでした。また、彼が初めてアメリカへ発つのを羽田で送ったことも鮮明に記憶しています。

このたび、一〇年余のアメリカ生活から帰国して、『思想の科学』(一九八〇年一一月号)に発表した彼の論文《周縁と新しい人間―金光教祖の場合―》を読み直してみました。生前にもっと丁寧に彼の考えを確認しておくのだったと残念に思います。そこで、私なりに、彼の〈周縁〉についての視座を再構成してみようと思い立ちました。

彼は〈周縁〉という概念の三つの側面をトータルに駆使しているように思われます。第一はその空間性、つまり地理的・社会的構造からの周縁性。第二はその時間性、つまり流れゆく歴史の変遷過程（時代）からの周縁性。第三がもっとも強調されている宗教的心性の周縁性。ここでは紙幅の制限もあり、この第三の側面だけ考えてみます。

深層心理学の用語に識閾（しきいきthreshold of consciousness）というのがあります。荒木君はリミナル・ビーイング（liminal being周縁的存在）というターナーの言葉を使っていますが、threshold（敷居）もliminal（敷居の）も同じ心的状態をさしています。ついでにいえば、フランス語ではseuil（敷居）de la consciencеです。識閾とは意識の生起と消滅の境界域のことなのです。荒木君はおそらくこの概念を念頭において、意識の消滅をカオスとすれば、そこから生じてくる新しい意識（新しい人間）を創唱宗教の教祖像に重ねているのだと思うのです。マージナル・マンという社会学の用語もありますが、リミナルといいマージナルといっても、要するに境界域の人間が新しい人間像になるはずだというわけです。神の領域と人間の領域の交わる〈周縁〉、そこが新しい人間誕生の場ではないか、と彼は問いかけているのだと思うのです。

青春期に何度も聞いた荒木君の見事なバリトンにもう一度耳を傾けたかったなと思いつつ、筆を擱きます。

（兵庫・気多教会）

第20回教学研究会
昭和54年7月12～14日

追　荒木美智雄

荒木美智雄先生の想い出

嘱託　早川公明

「歴史上の一人物としてどこまで追いかけても、史的究明方法では教祖の信心の世界には到達しえないのではないか？」「制度史の研究は大学の歴史学に任せて、あなたはもっともっと信仰共同体の解釈に踏み込んでもらいたい」「テキスト分析と言われるが、教祖も『覚』も、非常に具体的なコンテキストを携えてダイナミックに立ち現れているのだ」…。

荒木先生の批判の刃は、いつもストレートに私の心に深く突き刺さった。こちらが身構える間もなく、検討開始早々に不意打ちを食らう場合もあれば、検討をどうにか無事に終えそうに思えた次の瞬間に御託宣という場合もあった。先生に初めてお会いした紀要一八号論文の検討会の席では「信仰集団への着想が面白いですね」と共感して共同体論を展開するよう激励してくださったものの、以後は、厳しい批判の言葉を思いも及ばぬ角度からいつも浴びせられ続けた。恐らく、私が一番批判の槍玉に上がり、こっぴどく叩かれた？私自身はそんな印象である。

それにしても、研究所に来られるたびに、いつも何か宗教・哲学・思想界の新しい学問動向について話され、各分野をリードする人物や作品の紹介があり、大いに刺激を受け、啓発された。解釈学だとか記号論・隠喩論に心動かされた。直接Ｅ．Ｈ．エリクソンやＰ．リクールを読むよう薦められもした。かじってみても難解で歯が立たなかったが。

また、先生の前ではエリアーデ教授の門下以外は、たとえ島薗進先生や先輩の井門富二夫先生であっても遠慮容赦なく批判の俎上に乗せられ、特に日本の宗教社会学に対しては手厳しくその学問方法をなじっておられた。

一時期、所をあげて「民間陰陽道調査」に取組むことになったが、きっかけは、先生の「金光教祖は、日本で唯一人の陰陽道の宗教的リフォーマーだ」との観点からだった。

そんなこんなで、荒木先生は私にとってのスタブローギンであり、金神様であり続けた。

第１回民間陰陽道調査　昭和59年12月7、8日

その先生と一度、裏の龍王山を越えて沙美の海岸まで歩こうということになった。先生は数日研究所に籠りっきりで例の紀要二三号論文を執筆なさったが、その間の午前半日の出来事だった。先生が「ちょっと気分転換に」と思い立ち、世話係の私や何人かの職員と道無き山中を南に向って進めるだけ進んだ。結局途中で諦めて西側斜面へと下りはじめたら、突然先生が叫んだ。「春ランだ！あそこにも、あっ、そっちにも」。あたり一面春ランの株が見つかり、ひっそりと清楚な花を咲かせていた。先生の指示でいくつかを丁寧に掘り起こして持ち帰った。山を下って寂光院から続く畦道を歩いていると、またしても突然「あっ、野蒜の塊だ！掘って今晩の酒のつまみにしよう」。この地に長く暮らす我々も今まで知らずに見過ごしてきたのだ。先生が山野の草花にも詳しいのに皆驚いた。昼食後は我が家でゆっくり音楽を聴いて過ごした。「バロックだね。宮廷のお抱え作曲家たちの貴族のための音楽。その貴族たちを市民は革命でギロチン台に送った。なのになぜかその音楽に我々の心が安らぐ」。寛いで横になりながらそうおっしゃった。コーヒーから立ち上る湯気とタバコの煙が春のやわらかな陽ざしに映っていたあの時が今も懐かしい。

（愛知・牧野教会）

「聖なるもの」への遠望

―「覚帳」の書きぶり研究から―

第一部所員　岩崎繁之

先生を偲んで　悼

荒木美智雄先生の訃報に接した時、昨年の教学研究会でのある光景が浮かび上がった。第一日の日程が終わり、いつものように懇談会会場へと移動する際、その日の内に帰られる荒木先生は、他の嘱託の先生方と会話を交わされていた。その時の、手を握り、肩を軽く叩き、何度も頷きながら目で語り合うその姿には、言葉ならざる言葉が交わされていたように思う。そして、車に乗り込んだ先生を、他の先生方は姿が見えなくなるまでじっと見つめておられた。何とはなしに胸騒ぎを催したのだが、過ぎゆく日々にいつしか記憶の片隅に追いやっていた。このことが、訃報によって思い起こされた。金光教への、教学への思いが交感されていたのだろうか。その瞬間に触れ、今から振り返れば「今生の別れ」とはあのようなことかと気付かされる。改めて、先生の論文（「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』―その宗教的意味について―」紀要二三号）を読み返すと、一八頁末尾の一文に目が留まった。そこでは、教典刊行以降の課題として、信心の「構造化」、つまり固定化へと進む問題性と、創造的信心の構築の可能性という二つの論点が示されていた。永遠の課題ともいえる難題であるが、信心する者に意識すること、抱え込まれてあることが求められている。

私は、現在、「覚帳」（写真版）の文字の書きぶり（筆致）を分析することで教祖に迫るべく格闘している。より正確に言えば、取っ組み合う前の間合いを取っている段階に過ぎず、組ましてもらえていないのかもしれない。「覚帳」のメモ書きのような記述形態。大小、濃淡のある文字の具合、さらに行間に詰め込まれ重ねられた追記や貼り紙。先人達の格闘の末に、これらの言葉は活字や現代文に改められ教典として読むことが出来る。と同時に反転して、「本当に読めているのか」「読むってどういうことなのか」という疑問が生じてくる。写真版の原典と活字になった教典を行ったり来たりしているうちに、原典から教典へと文字が活字化していく流れがある一方で、原典の形態それ自体がそもそもどのようなありようを表しているのか分かりたいと思うようになった。教祖、そして神の思いの交錯がその文字をしてあらわしめられているのではないか。

世界のあらゆる宗教現象から金光教を見る荒木先生の立場からすると、ひと文字からの究明を試みる私は、ミクロを通り越してミニマムな営みに違いない。しかしながら、人間と聖なるものとの関わりの瞬間に思いを寄せるとき、思いのところで実は繋がっているのではないか。先人の業績に導かれ、大きな先生の志に触れつつ、ここからの歩みを進めていきたい。

第12回紀要掲載論文検討会　昭和55年12月11日

追　荒木美智雄

一隅を照らし　千里を照らす

―荒木美智雄氏のこと―

所長　竹部　弘

荒木先生が宗教学者として常に仰ったことは、宗教を、他の様々な人間的営みに還元できぬものとして探究することであり、特に近代化以来の歴史を反省的に顧み、未だ文明化される以前の生活・信仰と照らし合わせつつ、現代の状況に向かって立つ宗教の在処を求めることであったと思わせていただきます。

その発言には泰然たる風姿と共に独特の余韻が湛えられ、どこか自身の信心の原風景と重ねながら求める説教師の趣もありました。話が山場になると、眼を見開いて低く押し出すように語られましたが、そこにもどかしいギャップ、先生の思いに足る言葉が人の世には充分でないとの印象を抱いたのは、私だけではないと思います。

信仰という曰わく言い難いことを言葉にする困難は、凝縮された表現となれば尚更ですが、その中でも「覚書」「覚帳」についての歴史の神話化と神話の歴史化が同時に進行する物語であるとの指摘(紀要第二三号)は、私が入所間もなく出会って以来、神と人間と世界と歴史を総合的に対話的に捉える視点として、研究を進める上で通奏低音のように響く、触発される導きであり、乗り越えるべき壁でもあります。

また『宗教の創造力』(講談社学術文庫)の「あとがき」に、次のような一節があります。

宗教においては、聖なるものの顕れは、ほとんど必ず『聖なる中心』を構成するが、聖なる中心は、多くの場合に同時に『聖なる非中心』である。そして、聖なる力は、多くの場合に、『聖なる無力』において始めて受け止められることができる。力なきものの宗教が聖なる力を与えられ、救済力を持つことになる。そのような逆説的展開は、宗教史や宗教現象においては、聖なるものの顕れとともに常に起こっている。

この一節についてお尋ねした時に、まず返ってきたお答えは、「書いてみたかったんです」というものでした。その時は先生の心に流れる憧れを聞く思いでしたが、それはまた、先生の学問を根底で支えるもの、世界的な視野と人類史的な射程で問題を捉えつつ、この世に生きる一人一人の人間の悲しみ苦しみと共に死んで蘇るいのちの不思議を、宗教は生き続けてゆかねばならぬとの祈りとも申せる言葉でありましょう。

そのことは教学研究にとっても、教祖論・教義論・信仰動態論に亘る基軸となるものであり、昨年の教学研究会での教学は何を以て教学であるのかという問いかけと共に、金光教学が自己吟味の真髄として自らに把持していくべき御遺言と銘じております。

第四七回教学研究会
平成二〇年六月二六、二七日

研究成果の光を全教に

研究員　保坂　道照

私は、ずっと所外の人間である。しかし、教師の資格を頂いてから二十一年間、少なからず研究所と関わりをもち、また、お世話になってきた。浅からぬご縁があったのであろう。

昭和六十三年に学院を卒業後、直ちに学院職員となり、学院助手の時代、育成研修の一環として研究所の研究生向けの「総論」を一緒に受講させて頂いた。それ以外に、部長クラスの先生に学院にご出向頂いての講義もあった。学院教授（現在は「講師」）になってから後には、紀要『金光教学』の勉強会でその年々に発表された新たな論文に学ばせてもらい、時には学院職員の代表として紀要掲載論文検討会にも出席させて頂いた。儀式事務御用奉仕体制の折、助手や若手の所員の先生方とは、長らく駐車場係でご一緒させて頂き、御用の合間に現在の研究関心や取り組んでいるテーマについて話を聞かせて頂いて、このお道の信心を明らめようとされる真摯な姿勢に、私自身がたいへん刺激を受け、襟を正されたことが幾度もあった。有意義で、とても楽しい一時であり、今では貴重な思い出となっている。

平成十四年に学院を退職し、在籍教会で御用を頂くようになってからも、研究員としてお引き立て頂き、多忙さや煩雑さの中でとかく薄れがちになる教学的な関心や問いを、教学研究会、その他の会合の場にお招き頂くことで喚起され、確認させられてきている。

提言

さて、今回「提言」欄に、研究所に対する期待、要望等を寄稿せよということだが、前述したように、私自身のスタンスが一方的に所員の先生方の成果やご姿勢を吸収させて頂くという向きでここまできたものだから、「提言する」というような大それたことは言えない。少なくとも研究に資するような内容のものは無理である。

ただ、少なからず研究所とのご縁を頂いてきた者として、また、ずっと紀要『金光教学』のファンであり、今時の言葉で言えばサポーターである者として、持ち続けて来た思いがある。それは、研究の素人からみて、紀要は難解だという率直な感想だ。そして、折角のすばらしい成果をもっと全教の多くの信奉者に理解できるような形で表現する機会を設けるか、あるいは方途をとって頂きたいという切なる願いである。

もったいないのである。新しい、また、すばらしい信心の発見がそこにはある。さらに閉塞状況に向けた一筋の光がそこにあるかもしれないのに、今まで全教に向けてのその光が十分には届いてこなかったように見える。実は、光は届いているのかもしれないが、それは紫外線や赤外線のような光であって、可視光にはなっていないようなものなのではないかと思わされる。

もちろん、以前の『教学叢書』の発刊、近年の教学講演会の開催など、時に応じて、教学の営み、成果をわかりやすく発信する機会が設けられてきたことは承知している。同時にその取り組みが、抱えておられる業務量をより膨大にさせ、それによる繁忙さを生むことを理解しているつもりだ。そのうえで、なお言わざるを得ないのは、仮に何かを照らしたとしても、見えない光では人間は何も見ることができないからである。

紀要論文に直接それを求めるつもりはない。その役割は私なりに理解しているつもりである。だから、他の方途によって研究成果をより広く、わかりやすく全教へと発信していくことにも一層積極的に取り組んで頂きたいとお願いしているのだ。まちがいなく全教が、タイムリーに研究成果の光に照らされることを待ち望んでいると信じるからである。

（愛媛・川之石教会）

今春、客殿の障子の張り替えを行いました。
全職員をあげての大仕事。前回の張り替えを経験している職員も半数以下となり、ああすればいい、こうすればいいと試行錯誤しながらも何とか張り終えることが出来ました。

研究生自己紹介

五月一日、本年度の研究生、早川貴子さん（愛知・牧野教会）が入所されました。九月三〇日までの五ヶ月間委嘱され、実習に取り組みます。

のどかな春の午後です。聞こえてくるのは、鳥のさえずりとたまに通る飛行機のエンジン音くらい。窓の外には明るい日差しが地面に白く照りつけているけれど、建物の中は薄暗くひんやりとして…。見上げるような大きな木製のドアを出て、このままこの建物のなかを探索してみたい。そんな誘惑にかられて、つい用事も無いのに席を立ち、廊下に出てみたりしたくなります。

いやしかし、今日中に書き上げなければいけない『聖ヶ丘』の原稿を前にした研究生にとって、そんな甘い行動が許されるはずもないのでした。

そもそも、たった九〇〇文字程度の自己紹介を兼ねた研究所の所感についての文章が、なぜこんなに進まないのだろう。普通だったら悩んでも一～二時間で書けそうなものなのに。考えれば考えるほど、書くべきことが浮かんできません。…うううう。

「考えすぎ！」部屋に入ってきた大林先生から一言！その通りです。

思えば、ほんの一ヶ月前まで、学院から毎日見上げていた研究所。あの頃は無邪気に、なんだかすごく惹かれるような、そしてかなり恐いもの見たさのような気持ちで、上って来たのでした。そこで出会ったのは、たくさんの本と、それに埋もれかけた机と、コーヒーの香りとお酒に囲まれて、教学している人たち。（こういう書き方をすると「教学する」ってどういうこと？という質問が飛んできそうで、また筆が止まりそうです。）膨大な知識を持って常に問いを求め続けている人たちです。

新しい研究生にも、自分なりの問いや課題を見つけるようにといろいろな質問をしてくださいます。そうして質問され、自分の中に答えを探す度、自分の中のわからなさに出会ってたじろぐのです。自分は何を知っていて何をわかっていたんだっけ。答えようとする度に、そこが危うくなって、自分のことがわからなくなる。

なんて新鮮な体験！

この場所では、自分があやふやに発した言葉も、敏感な複数の耳がピピッと反応してくれて、即座に的確な指摘や、「こんな本読んで見たら」、とガイドが示される。ジェットスライダーに乗ったみたいで、最初はちょっと恐いような気もしてとまどいましたが、この波に乗って、どんどんいけるとこまでいってみたいな、という気がしています。

彙報

（平成20年6月1日～平成21年5月31日）

新職員紹介

昨年一一月七日付で本所主事に就任した佐藤剛志さん（広島・広島教会）は、本部教庁教会部での御用を経て（四年二ヶ月）、この度事務室の御用にあたる。趣味はスポーツ全般で、その中でもバスケットボールに関しては只ならぬ思い入れがあるようだ。高校時代には全国大会常連チームでバスケ漬けの毎日を過ごしていたという佐藤さんは、本所に上がる坂道を通る度、部活で毎日走り込まされていた坂を思い出し時々吐き気をもよおすとのこと（地獄坂の倍の長さ）。そのおかげで、足腰は鍛えられ当時五〇㍍のタイムは五秒台であったとか（今は…）。「環境の違いに戸惑うこともありますが、特別なことは思わず、ここでしか味わえない一日一日を大切にして、しっかり神様の御用に使って頂きたい」と抱負を語る。

人事異動

（1）職員（教団職員）

○助手島田悠香、6月30日付で辞任。

○主事太田信治9月30日付で辞任。

○教師白石淳平、同高司智太郎、10月1日付で助手に任命。

○教師佐藤剛志、11月7日付で主事に任命。

○部長加藤実、12月19日付任期満了、翌日付で再任。

○主事竹中梢、3月31日付で辞任。

（2）研究生

○研究生白石淳平、同高司智太郎、同長井美智恵、9月30日付で委嘱期間満了。

○教徒早川貴子、5月1日付で研究生を委嘱。

（3）嘱託

○嘱託荒木美智雄、12月19日死亡により退任。

○嘱託金光和道4月17日付委嘱期間満了、翌日付で再度委嘱。

（4）研究員

○研究員金光清治、同橘高真宏、1月19日付で委嘱期間満了、翌日付で再度委嘱。

（5）評議員

○評議員沢田重信、7月31日付で任期満了。

21年5月31日現在　本所職員数16名（所長1部長3幹事1所員1助手5事務長1主事4）、研究生1名、嘱託9名、研究員5名、評議員5名

おめでた

☆結　婚☆

○助手白石淳平は3月25日、長井美智恵さん（千葉・柏教会）と結婚

☆出　産☆

○主事中西教幸・美由祈夫妻に7月24日、長男天智（てんち）くん誕生

○助手佐藤道文・郁江夫妻に4月19日、長女瞬（しゅん）ちゃん誕生

SAKAMICHI

通信『聖ヶ丘』は、第30号を刊行させて頂くことができました。

刊行にあたり、所内外の先生方のご協力を頂き、支えられ、ここまで続けてこられましたことに、改めて御礼申し上げます。

今号では、昨年亡くなられた、元嘱託の荒木美智雄先生を偲んでという特集をもたせて頂きました。頂いた原稿から、荒木先生が宗教学者として、また本所嘱託として、本教教学の上に、多大なる貢献をなし下さったことに思いを新たにさせられました。数年前の事ですが、荒木先生に提言のコーナーへの投稿をお願いしたことがありました。その時は「今、本の執筆中で五月の上旬を過ぎた頃には目処がつくので、その後で良ければ書きましょう」というお返事を頂きました。しかし、その日程では本所の原稿締切を大幅に過ぎてしまい、期日までに刊行ができないとの判断に至り、「改めて別の機会にお願いします」とお断りをしてしまいました。今では執筆していただければ良かったという、後悔の思いで一杯です。

荒木先生の教学への志を大切に受け継ぎ、職員一同、教学研究の上に精進してまいります。

発行・印刷　金光教教学研究所
岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三
電　話　（〇八六五）四二―三一一七
ＦＡＸ　（〇八六五）四二―三一一九